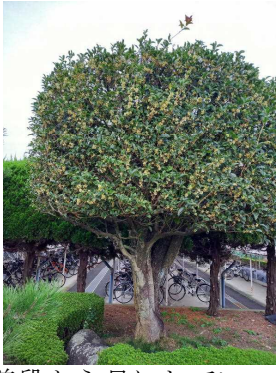
前橋西高等学校　校長室だより

令和２年１０月９日
第２６号



正門の脇に今、銀木犀（ギンモクセイ）が咲いています。よく似ている金木犀（キンモクセイ）が色の濃い橙黄色（とうこうしょく）の花をつけるのに対し、薄黄色の花は控えめで、香りもキンモクセイに比べてほのかなため、清楚な佇まいといった印象です。いずれも同属の常緑樹で、普段から目にしているはずなのですが、特徴があまりないせいか、その存在を意識することは稀です。けれども、９月下旬から１０月上旬のこの時期になると多数の花をつけるので、それを目印に気をつけてみていると、意外なほど至る所に植えられていることに気付きます。「心ここにあらざれば視れども見えず」という言葉がありますが、モクセイに限らず、日頃から見ているはずなのに、見ようとしないと認識できないというものは、身のまわりに多くあるようです。

最近気になったニュースのひとつが、新型コロナウイルス対策に関する持続化給付金の不正受給の問題です。本来は個人事業主に支給されるはずの国の持続化給付金を、受給資格がない学生やサラリーマンなどが、不正に申請し受給していたというものです。また、問題が報じられてからは、不正な申請をした人や関係者が「金を返したい」などと相談するケースも相次いでいるとのことです。年代が判明した事例のうち大半が10～20代の若者で、安易に関わった後、報道などから事の重大性に気付いて相談したとみられています。

ＳＮＳで、友人や知人などから誘われたという場合も多いようです。「もうかるからやってみなよ」、「自営していることにして申請すれば持続化給付金がもらえる」などの甘い言葉に誘われての不正です。詐欺にあたる行為を、あまり抵抗感なく行ってしまうというのは、友人もしているからなのでしょうか？　制度を理解していないからなのでしょうか？　楽な方法でお金を手に入れたい、国からもらうのだから誰にも迷惑をかけていないだろう、そうした軽い気持ちもあるように思えます。

少し古いのですが、我が国の高度経済成長が終わりを告げ、先行き不透明な低成長期に発表された論考を思い出しました。その論考が最初に発表されたのは1975年（昭和50）、月刊誌の『文藝春秋』誌上においてなのですが、その後、2012年（平成24）に文春新書から発売もされました。著者は「グループ一九八四年」となっています。これは、元学習院大学教授の香山健一（こうやまけんいち）氏を中心とした各分野の専門家からなる学者の集団とのことですが、実質的には香山氏が中心となって執筆したようです。日本という国、社会がはらんでいる問題を指摘し、自壊に向かいかねない状況に警鐘を鳴らす内容です。私が読んだのは新書の方ですが、発表から40年近く経過したにもかかわらず、新書として出版されたということだけあって、今の社会を考える上でも参考になるところがありました。

著者は次のような形で警鐘を鳴らします。古代ローマ帝国のように多くの文明は、国民が利己的な欲求の追求に没頭し、難局を自らの力で解決することを放棄するようになり、しかも指導者たちが大衆迎合主義に走ってしまうと、自壊、自ら滅んでいってしまう、と。日本も同じような道を歩んでいるのではないか？　もちろん、今はコロナ禍にあり、この状況下で政府に対して救済を求める声は、古代ローマ市民が「パンとサーカス」を求めていたものとは異なります。しかし、先に触れた不正受給の問題はどこか重なるところがないでしょうか？

「大衆」という言葉が出てきました。現代社会を表す場合にも「大衆社会」という語が使われることがあります。大衆については、定義しようとする人によって微妙に異なる点もあるようですが、スペインの哲学者オルテガは、1930年に出版した著書『大衆の反逆』の中で、自分の欲望を無制限に膨張させる一方、安楽な生活を可能にした一切に対して尊敬の念を払わない点などを、大衆の特徴としてあげています。最大の関心事は自分の安楽な生活でありながら、その実、その生活の根拠には連帯責任を感じていないという面もあるというのです。

学校という場に置き換えて考えてみましょう。学校においては、思考力・判断力・表現力などを身に付けるために、探究的な活動を行う場合があります。また、課題を自ら設定し、その解決に向けて考えたりする時間が設けられたりします。これらの活動に対しては、ある程度の時間的ゆとりが設定され、自由に使える時間もあったりします。しかし、そうした時間が設定された目的を意識していなかったり、そもそも「自由」の意味をはき違えてしまうと、時間の使い方を誤ることになり、期待していたような力を伸ばすことに繋がっていきません。さらに、進学して上級学校へ進んだ場合も同様なことが起こり得ます。社会の中で自立し、ひいては指導的な立場に立ってもらうために、本来は専門的な能力を磨いてほしいはずなのですが、安穏とした時を過ごすばかりであったり、その後の就職などで報われなかったりすると、自分のことは棚に上げ、社会などに対する不平を口にするだけということにもなりかねません。

１年半後、令和４年４月１日からは、成年年齢が１８歳に引き下げられます。